

話し合いの可能性

—異なる他者との対話を通じた相転移—

企画責任者：村田和代（龍谷大学）

話題提供者：水上悦雄（情報通信研究機構）村田和代（龍谷大学）森本郁代（関西学院大学）

ディスカッサント：佐藤 徹（高崎経済大学）佐野 亘（京都大学）

1. はじめに

近年、地域の課題探究や政策形成、あるいは組織活性化やコレクティブインパクトのプロセスで、セクターを超えたひとびとによる話し合い実践が積極的に取り入れられるようになってきた。本ワークショップでは、このような（成人による）課題解決型の話し合い実践をターゲットとし、話し合いの可能性を探究することを目的とする。既存の研究では、話し合いを合意形成や意見集約のツールとしてみなす場合が多いが、本ワークショップでは、こういった機能以外の話し合いの可能性について考える。とりわけ異なる他者との対話を通じた個人の「相転移」（大きな転換、変容を意味する）（佐野ほか、2017）について、「学び」という観点から考察を試みる。

本ワークショップで着目したい成人の話し合い実践に伴う「学び」の側面については、近年の状況的学習論に端を発する学習に関する理論および生涯学習分野における成人の学習についての理論をてがかりとする。変容的学習論（メジロー、2012）では、子ども期の発達に伴う形成的学習と、成人の学習＝変容的学習とを明確に区別し、成人の学習を、1. 意味スキームによる学び、2. 新たな意味スキームを学ぶこと、3. 意味スキームの変容による学び、4. （意味）パースペクティブ変容による学びの4つの形態に分類する。意味スキームとは特定の態度や信念、意味パースペクティブとは意味スキームのまとまりであり、習慣化された志向と期待である。特に3や4の「変容の学習」は、社会的実践の中で他者との対話によって生み出されるものと考えられる。

話題提供者（及びディスカッサント）らは、成人による課題解決をめざした話し合い実践現場のエスノグラフィーと話し合い談話の収録を続けている。これらを通して、異質な（世代、所属組織等が異なる）他者とのフェイストゥフェイスの対話を通して参加者に相転移が起こっていることを発見した。具体的には、「当事者性がうまれる」「他者をつながろうという志向性がうまれる」等である。また参加者の変容は、地域や組織の相転移にもつながる可能性がある点も共有した。

ワークショップでは、まず話題提供者から実証研究報告を行う。話し合い参加者の変化が相互行為上どのように現れているのかを考察し、それらは何を意味するのか、「学び」という観点から解釈を試みる。通時的考察（水上、村田①）、談話比較による考察（村田②）ミクロな視点からの考察（森本）といった異なる観点からの報告を行う。4つの報告の後に、個人の変容の意義や、個人の変容と組織・地域の変容との関係性について、行政学の観点からコメントをいただく。

WSの後半では、参加者で3～5名程度のグループになって、異なる他者との話し合いを体験してもらいながら、話し合いの可能性について会場全体で考える。

2. 通時的な観点からの事例分析（水上、村田）

本報告では、異質な他者、特に立場の異なるメンバーとの継続的な話し合いを含む協働活動を通じた意識の変化を、発言や相互行為の変化から逆照射することを試みる。

筆者らの関心は、立場や考え方の異なる他者との対話や協働活動を通じて、個人の意識や、判断の前提となる枠組みが変わる（変容する）学習の側面にある。そのような学習過程は本来的には特定の対象者を長期に渡り観察する必要があるうえに、いつ、それが生じるのかの予測もできないため、容易には研究素材を得難い。そこで本報告では、その過程を垣間見ることができる一例としてイノベーション・コンサルティングやファシリテータ育成などを事業とする民間企業が主催したまちづくりプロジェクトを取り上げる。このプロジェクトは“企業、NPO、行政からさまざまな立場の人たちが参加し、地域課題を解決するビジネスモデルをつくるまちづくりプロジェクト”であり、30名の参加者が半年間、月1回集まって、様々なファシリテーションワークの実施手法を学びながら、地域の課題を自ら考え、それを解決する事業を立ち上げる。それは実現可能かつ持続可能な事業として提案、継続していくものであり、参加者はその過程で多くの気づきと学びを得て、一社会人としても、人としても成長していく様を見て取ることができる（村田、2019；水上、2019）。

2.1 通時的な観点からの事例分析—その1 (水上)

本報告では、プロジェクト中に形成された行政1名、NPO1名、大学教授1名、企業4名の7名からなるチームを対象にする。このうち事前に収録の承認を得た行政からの参加者0氏を対象として、この0氏が行政からの一参加者という立場から、チームメンバーとともにプロジェクトを作り上げて行くプロセスの中で、如何に意識が変容していったかを、その言動やコミュニケーション行動から読み解くことを試みる。分析対象は、7回 (Day1~Day7) に渡るセッションのうち、チームができる前の最初の段階 (Day1: フェーズ 1)、暫定チームができた直後の段階 (Day3: フェーズ 2)、チームとしての活動を試行錯誤しながら進め、一度チームでトライアルとして観光ツアーをしてみた後の段階 (Day4: フェーズ 3)、事業としての形が見えてきた段階 (Day5: フェーズ 4) のそれぞれの話し合い場面における対象者0氏の活動である。

以下の会話事例2-1は、とりあえずのチーム形成後のフェーズ2 (Day3) における典型的な0氏の発言を含む会話である。このチームは地域密着型の体験プログラムや観光ツアーを通じて地域内外の人々をつなげるような事業を立ち上げることをテーマとして選んだ。この場面は事業に関連して体験コンテンツについて意見を出し合う中で、農業体験の一環として、昔ならではの農家スタイルの民家に泊まる「農泊」を例に挙げている状況であり、AとBはこの農泊について0氏よりも良く知る立場にある。

[事例2-1] (フェーズ2)

- 01 A: 本当にオフィスとかに泊めようと思ったら: (.)>もう<民泊の届け出をしないと[(いけない).
02 O: [う:::[:ん.
03 A: [農泊って、農家 () が] 前提だったから::.
04 (0.6)
⇒05 O: 農泊って農で泊ま[る:
06 A: [そうそう。>だから<旅館には特例でできる(.)なんですけど:。
07 O: ふ:::[:ん.

ここで注目したいのは、5行目の0氏の発言の形式、特に問いの形である。0氏はAに対して、「農泊」とは何か(どのような漢字をあてるのか)を確認するフォローアップ質問をしている。このフェーズ2に限らず、Day4までは、「認識上の権威 (epistemic authority)」(Heritage, 2012) の観点から言えば、自分がより知る立場にない者 (K-) あることを前提とした、他のチームメンバーに対する情報確認要求のための確認質問が発言の多くを占めていた。それがフェーズ3以降、次第に減っていく。ではどのような発言が増えたのか、フェーズ4 (Day5) における0氏の典型的な発言例を見てみたい。この場面は、Cが自ら関わっている企画 (おとなりサンデー) について、うまくプロジェクトに取り込めないか、提案しているところである。

[事例2-2] (フェーズ4)

- 01 C: () メディアにもとりあえず[いってもらえるんで。
02 D: [そうそう。
⇒03 O: おとなりサンデーの企業版っていう:: (.) 感じですか?
04 C: >そうで[す<
05 O: [う:::[:ん.
06 C: [うち、うちどういう立ち位置 () なのかわかんないんですけど:。 エスサップ:で:
07 (0.9)
⇒08 C: >おとなりサンデー<ってほんとは何、何課になるんですか?
09 (0.4)
⇒10 O: 住民、完全住民の[:フランスからはじまった[こ
11 C: [完全住民なんだ。
12 B: [隣人の日みたいぬ感じですよ[ね。
13 D: [そうそうそう。
14 O: [孤独 () 孤独死とかがないように[:、予めこう顔見知り
15 作っておこうっていう意味合い () 。
~中略~
16 B: Oさんが:>そうですね<ここののか: () ここののか[:。
17 D: [全体なのかです[ね。
18 O: [まあそうですね。
⇒20 ((地名))のま(.)盛り上がればわたしh的にはh

0氏の3行目における問いは、一見事例2-1で見た確認質問と同型である。しかし、聞かれたCが逆に、0氏に質問を返して(8行目)、それに0氏が答えている(10行目)。3行目における0氏の確認質問は、事例2-1のときのような純粋なK-としての確認質問というよりも、その後のやり取りに見られるように、議論を深めるための質問として機能していることがわかる。つまり、Cの提案内容を端的な言葉で要約する(「おとなりサンデーの企業版」)ことで、自分の理解が

それよいか、言い換えが的を射ているのか、の確認をしており、明らかに事例2-1の確認質問とは異なる。さらに言えば、CのO氏への問い返しが可能であったのは、そもそもO氏が自分より知る立場(K+)であることを知っていて、そういう意図のもと、自分に対して問われているのだということを理解したうえで、O氏に質問していることが見て取れる。これだけではなく、「行政の立場としての意見を求められる相手」として、チームメンバーから問いを投げかけられ、かつそれに明確に答えている場面がフェーズ3以降に多く見られた。さらにO氏の立ち位置が、「行政の一員としての自分」というものを明確に示しているのが、20行目の発言であり、どういう立場で発言したらよいかわからなかったフェーズ2までとは異なり、何らかの変化を経て、自らも、チームメンバーからも、確固とした立ち位置で話し合いの場で活動をしていることがわかる。

以上見てきたように、O氏はチームメンバーとの様々な活動を通じて、「変化」しているのがわかる。前項最後に取り上げたO氏の要約による確認質問は、実はファシリテーションスキルの一つである(村田,2013)。特段このプロジェクト期間中にそのような具体的な指導や指摘があったわけではないので、O氏が自ら獲得した、あるいはそのようなスキルとは気づかずに実践したものであると考えられ、そのようなスキル獲得という意味での学習は確かにO氏に生起していたと言える。しかし、O氏に生じた変化はそれだけではない。参加者は何らかの肩書を持った者として、このプロジェクトに参加しており、最初からO氏は「行政の側の人間」である。しかし、何者としてその場に参加し、何者としてメンバーに認識され、それがどのように話し合い活動に現れるかは、実は大きく変化している。O氏に限らず、参加メンバーの多くは、会社や上司に指名されて研修に参加した者が多く、最初の自己紹介でも「とりあえず言われたから来た」という者が少なくない。ところが、Day1が終わった後の感想として、「楽しかった」と述べた者が多かった(村田,2019)ように、まずは普段接点がないような異なる立場の人々と、普段とは違う場所で、未来について考えると言う活動をする中で、「個人として」この活動に関心を持つようになる。プロジェクトに目鼻立ちがついてきてチームを形成した頃までは、会社や組織の立場が見え隠れするものの、各人の個人としての立場をベースに話し合いが進められる。否定的な意見を言われたり、批判されたりすることもなく、次々と新しいアイデアが提示され、笑いが絶えない。ところが、プロジェクト実践を仮に試行してみたり、様々なステークホルダーを考慮に入れたり、マネタイズの問題や持続可能性の問題等、実際の課題が明確になるにつれ、沈黙が増え、現実的でない提案や意見は批判的に吟味されるようになる。一方、この頃から、プロジェクトに対して、各々の立場としての自分が何ができるのか、についての発言が増え、自然と「組織の一員である個人」として活動に参加するようになり、メンバー間でもそれが共有され、かつ、それをあえてその場で明示することなく議論が進んでいく。事例2-2の後半のやり取りにおいても、「行政として」「行政はどうですか?」のような問い方ではなく、「Oさんが」「私的には」のように、行政の人間であることを前提とした発言に変わっていることから、その変容が見てとれる。つまり、O氏自身が変容しただけでなく、O氏に対するチームメンバーの認識そのものが同時に変容している。

この変容はたまたまO氏に生じたのか、O氏以外にも生じているとすれば、同じような変容なのか、異なる形なのか、このプロジェクトだからこそ生じたのか、同じ設計であれば、別のプロジェクトでも任意の人に生じるのか、など更なる調査、分析を要するため、我々は継続的にクロスセクターの人々の話し合い実践の調査をしている。WSにおいては、時間が許せば、今年度別の場所で行われた同様のまちづくりプロジェクトを対象とした分析結果も報告したい。

2.2 通時的な観点からの事例分析—その2(村田)

2.1 水上の報告では特定の個人の変容に焦点を置いたが、本報告では話し合いの場(参加者全員)の変容を報告する。特に本報告では、Day1とDay7の終わり(チェックアウト)の発言を比較する。Day1、Day7とも、セッションの最後は、全員が円座になって顔の見える状態で、一人ひとことずつ話していた。何れも、セッション全体のファシリテータから、今日の感想について一人ひとことずつ発言するよう指示された後に一人ずつ発言していた。

発言にみられるアイデンティティ(自分自身や他の人をどのようにとらえているか)についてで、発言例では(i)と表示、挨拶表現((g)と表示)、参加者の発言に共通してみられる表現((s)と表示)を軸に、それぞれの回の特徴やDay1からDay7への変化について論じることとする。

Day1のチェックアウトの所要時間は15分間であった。チェックアウトでの発言例(省略なし)である。

(1)

①タムラです。②楽しい時間、過ごせました。すごい、③ありがとうございます。皆さんの熱い、いろんなアイデアだけじゃないんですよ、思いがすごくて、ここにいる人たちだけじゃないと思うんですけど、これなら何か面白いことできそうだなという、すごい力をもらったので、インスピレーションをもらったので、この先④楽しみです。⑤よろしくお願ひします。

(2)

あらためまして、①ヤマダです。結構、僕、つらいんだろうなと思って、来たんですけど、気付いたら、結構、時間、早くたって、びっくりしてます[笑]。

次回、^㉔楽しみに。^㉕ありがとうございます。

各参加者からの発言は 20～30 秒と「一言」という指示通り短く簡潔であった。自身の名乗り方についてであるが、名乗った参加者のうち「〇〇（苗字）です」が 14 名で、「△△（所属）の〇〇（苗字）です」（7 名）よりはるかに多かった。Day1 の話し合いでは、まずは一般的なテーマから始めて終わりの方では参加者個人に関するテーマを考える設えとなっているが、そのような実践を通して、それぞれが△△（所属先）のメンバーではなく、「個人」としてのアイデンティティが前面に出るようになったのかもしれない。

続いて、挨拶表現についてであるが、「よろしくお願いします」が多用されている。これは、初日ということで、初対面の参加者へのあいさつと考えられる。「ありがとうございます」も大多数の参加者にみられた。これは 1 日の実践を通して学びに対するお礼とみなすことができるだろう。

参加者間で共通して多用されている表現が「楽しい」（楽しみ、楽しかった等の活用も含む）である点に着目したい。加えて「〇〇（当該地域名）」という言葉も多く見られた。一日のセッションを通して「接点を見出した」「これから関わりたい」という変化が発言にみられた。

これに対して Day7 ではどのように変化したのか以下に考察する。Day7 のチェックアウトの所要時間は、Day1 の 3 倍以上の 50 分である。これは、各参加者の発言量が増えたことによる。以下はチェックアウトでの発言であるが、それぞれ長いため一部省略している。

(3)

^㉖お疲れさまでした。（中略）^㉗うちのチームは、すごい議論すると「なんか^㉘〇〇って、もっと地域の人に力を使ったら盛り上がるよね」みたいな夢や目標があるんですけど、それで、^㉙自分たちでどういう形で初めのアクションに落とせるんだということを考えると、もうちょっと詰めないといけないのかなとは思った。（後略）

(4)

^㉚お疲れさまです。（中略）そこからまた何か変化が生まれるかなと思っていて、それはそれ^㉛楽しみかなと思ってます。あとは、^㉜会社としてどう関わっていくかっていうのは、今回、まとめたものをいったん会社に持ち帰って、^㉝うちの会社もそんな俊敏な会社じゃないので、話をしていく中でどう関わっていくことができるかっていうのは、真剣に議論していかなくちゃいけないかなとは思っています。（後略）

アイデンティティに関して Day1 から大きな変化がみられる。個人の感想を述べるよう指示されていたのにもかかわらず、「うちのチーム」「僕たち」にみられるように、チームメンバーとしてのアイデンティティが顕著に表れている。自分自身のことを言う際には「個人的には」「自分自身としては」といった表現を用いて追加的に表明されている。もう一点特徴的なのは、「うちの会社」「うちの商店街」「自分の団体としては」といったように、所属先に言及している点である。所属先に言及している箇所は(4)にみられるように、所属している機関（会社）とチームのプロジェクトの推進との関連性を見出そうとしている発言である（例「うちはファッションの会社なので、それをファッションに落とし込んでいきたい」）。さらにメンバーシップの構築は、あいさつ表現の変化からも明らかである。Day1 では、初対面同士の挨拶である「よろしくお願いします」が用いられていたのに対し、Day7 では、ほぼ全員が参加者たちにむけて「お疲れ様でした」とあいさつしている。一例のみ「ご苦労様でした」もみられた。「お疲れ様」は同僚や仲間で用いられ、「ご苦労様でした」は通常目上には用いられない表現であることから、メンバー間のフラットな関係や仲間である連帯感が読み取れる。挨拶表現からも、チームメンバーのメンバーシップやフラットな関係性が読み取れる。

発言の中で他の参加者について言及する表現についても着目したい。「〇〇さん」「〇〇くん」という呼び方に加えて「みっくん」といったニックネームも用いられている。参加者は 30 代、40 代が中心ではあるが、20 代から 50 代まで広い年齢層で構成される。年齢やセクターを超えたフラットな関係性が構築されていることがわかある。さらに、関係性を表す表現として、「大学のゼミみたい」「フォーマルな友人」「仲がいい関係性」といった表現からも心地よい関係性であることもわかる。また、Day7 で多用されている表現として特徴的なのが、自分ごととして関わっていききたいという意思表示をする直接的な表現である。「がんばります」「しっかりやっていきたい」「もっと頑張ろうと思いました」「どんどんチャレンジしていきたい」にみられるように、約半分の発言にみられた点は興味深い。そして Day7 でも「楽しい」が多数の参加者の発言用いられていた。

複数回の話し合い実践を通じた参加者の変化は次の 3 点にまとめられる。1 点目として個人からチームのメンバーとしての変化、2 点目として参加者間の関係性（フラットな関係性の構築）の変化、そして 3 点目として地域や地域の社会課題に対する意識の変化（地域や地域課題を自分事ととらえるようになった）である。これらの変化を話し合い実践を通じた学び（学習）ととらえれば、チームワーク力や公共マインドが醸成された（学んだ）と言える。そして、変化（学び）を支えているのが話し合い実践への肯定的評価（楽しみながらわくわくしながら進めている）にある点にも留意したい。

3. 談話比較による考察（村田）

本報告では、同質なメンバーによる話し合いと、そこに異質な他者が入った話し合い談話との比較を行い、そこにみえる変化を考察する。某全国組織 A 地区女性部の支部長会の 2 回分の話し合い談話を比較する。1 回目が支部長だけの話し合い（話し合い 1）、2 回目は大学生が参加した話し合い（話し合い 2）である。当該女性部では、女性会の活動が停滞しているという課題をかかえており、一年かけて話し合いを通じた A 地区の女性会の活動の活性化をめざしている。

話し合い 1 は月一回の定例支部長会で行われた。参加者は 19 名（全員が A 地区内にある各支部の支部長）である。話し合いのテーマは、A 地区女性会メンバー（約 150 名）にとつたアンケート結果の概要（講義）を聞いた後、講義と資料（アンケート結果の資料：アンケートでは女性会の活動についての意見や要望が問われている）に基づいて、気づいた点について共有し、そこから今後の活動をどうすればいいかの話に発展させるというものである。

話し合い 2 は話し合い 1 の 1 か月後の定例支部長会で実施された。参加者は支部長が 13 名、大学生 5 名である。話し合い 1 の最後で、「A 地区女性会を活性化するには若い人を入れる必要がある。まずは若い人と話すことから始めよう。」という点が参加者間で共有され、実験的に 1 チームに一人若者（大学生）に入ってもらって話し合いを行うことになった。話し合い 2 のテーマは、当該組織女性会の活動について話した後、話し合い 1 と同様 JA 女性会の今後の活動についてということ話を話した。

本報告では 2 つの話し合い談話の最初のフェーズ³⁾に着目してその変化を考察する。以下、変化の大きかったトピックの推移と発言者のアイデンティティに焦点を絞って考察する。

話し合い 1 は、4 つのグループで同時進行していたが、共通した特徴として際立ってみられたのが、テーマからの逸脱、個人的なエピソードの出現である。話し合い 1 の最初のフェーズでは、A 地区女性会メンバー（約 150 名）にとつたアンケート結果の概要（講義）を聞いた後、講義と資料をみて気になる点を各自付箋に記入した。それを見ながら気になる点を共有するというテーマで 20 分間話し合った。話し合い前の講義では、A 地区女性会に入つてよかったこと・よくなかったことや女性会の活動についての意見を中心的に紹介されていた。アンケート結果の資料の最初に女性会メンバーの現在の関心事が年代別で記されていた。主催者側としてはアンケートの中心的設問の前の予備的情報の収集を目的に収集した項目であったのだが、それぞれのグループの話題の中心は、「私」（個人）の関心事であった。1 つのグループの例を示す。口火を切ったのは W である。

[事例 3-1]

- 01 W: このアンケートね、一つね アンケートがあったときは 12 月で、ほで、今日で 2 月の初めて、ちょっとの間[で 年いった]のもある=
02 M: [年いったん?]
03 W: =けども、生活面の優先事項が変わってきた。
04 F: どないしたん?
05 W: やっぱり、家族に、
06 M: この間、言うたから？[お父さん
07 W: [だから今までは関心のなかった、
08 M: 健康とかな。
09 W: 介護問題がすごく今一番の関心事に。ちょっとの間で変わると

発言を開始した W は、自分自身の関心ごとである「介護」について話し始め、上記に続いて介護のエピソードを話す。それに続いて他のメンバーも、自身の家族の介護や健康について自身のエピソードを展開する。以下 7 分間のトピックの推移は以下のとおりである。

表 1 話し合い最初の 7 分間のトピックの推移

W	おじいさんの介護
K	おばあさんの介護
M	おばあさんの認知症の介護
F	娘の病気

話し合いのテーマは、アンケート結果をみて気づいたことを共有するということである。想定されるのは、各地区の支部長として、女性会の活動についての意見がどのようなものかについて話し合うことであるが、発言を開始した W は、自分自身の関心ごとである「介護」について話し始めた。それに続いて他のメンバーも、介護のエピソードを語りはじめた。話し合いのテーマによりやく戻ったのが、N の発言である。その後約 10 分間女性会の活動についての意見をめぐって話し合い、最後に約 3 分間、M が介護の苦労エピソードが話され、全体司会者によってフェーズ終了となった。最初のフェーズは以下のようにまとめられる。

7分間	主テーマからの逸脱(個人的なエピソード)
10分間	主テーマについての話し合い
3分間	主テーマからの逸脱(個人的なエピソード)

一方、話し合い2では、上記のような個人的なエピソード(の連続)による主テーマからの逸脱みられなかった。

次に発言者のアイデンティティの変化について、例に挙げたグループのメンバーWに着目して考察する。話し合い2の最初のフェーズでは、学生(S2)に女性会について説明をしている。

[事例3-2]

- 01 W: だから、町内会に子ども会とか女性会とかあるやんか。その女性会の中の(組織目)に入ってる人の役は、
02 集まり。うん。
03 S2: もっぱら親睦会みたいな感じなんですか？
04 H: もっぱらっていうか、まず一応、最初はそうですね。うん。
05 W: うん。だから、その女性会の人でも、町内会の人でも、入ったら、いろんな役があるでしょ。それが嫌で入ら
06 ない人が、今、多いわけす。それを勧誘するために、こういう親睦会とか。
07 H: 親睦会とか楽しいことをね。
⇒08 W: 手芸の会とか。手芸の会なんか、私なんか苦痛しかないんだけどhhあるわけす。今は、だから、入って
09 ない人を、彼みたいな家族をどういうふうに入れるかが、地域もそうだし、(組織名)も問題なっている。
10 S2: なるほど。

事例3-2において、一か所「私」が出てくる。これは私人としての個人的な「私」というアイデンティティからの発言である。Wの発言中「私なんか苦痛しかないんだけど」の箇所だけ小声で独り言のように発言され、最後に笑いが付加されている。これは言いにくいことを発言する際に用いられる緊張緩和の笑い(Murata, 2018)であろう。客観的な説明が続く中で個人的な発言は控えるべきであるという思いから笑いが付加されていると考えられる。

[事例3-3]

- 01 W: だって反対に、町会の役がだんだん薄れてきている分、友だち探しに入ってこられる方もあるんですよ、最近。地域の女性会の活動が
02 やっぱり少なくなってきたからじゃあ(組織名)の[()]
03 H: [ああ:
04 S2: なるほど。
05 H: うちの地域は割かしそういう人が少ないんですね。うん、でも、やっぱりお一人になられてね、いらっしゃって、お一人になられて
06 寂しいからね、女性会に入っはたらね、60代ぐらいの人やったら、それはあなたが入ってるか入ろうかというような方もそりゃ、
07 いらっしゃるやろうけどね。
⇒08 W: 私、一つ思うんですけどね。婚活を入れればいいんじゃないかなと。
09 S2: 婚活hh
10 W: 絶対、そういうのがあれば、入って。うんうん。地方の農家さんはやっぱりお嫁さん、農家を継いでくれるお嫁さんを探してるんやけど、
11 都市部だとそういうこと関係なしに。

上記発言でみられる「私」は、私人としての私というアイデンティティというよりも、地区支部長としての「私」としての提案であると解釈できる。このように話し合い2では、私人としての「私」から支部長としての「私」というアイデンティティ変容がみられた。

異質な他者が入ることで、話し合いに向かう態度(意識)が変わっていると言える。話し合い1は、テーマから逸脱する傾向が高かった。しかも、支部長会の話し合いであることから、支部長として発言することを望まれているという状況であるにもかかわらず、私人の「私」として発言している。加えて、求められる話し合い参加者としての一定の想定(ルール)である、話し合いのテーマを共有してそれに即して話を進めるといった想定からも逸脱する傾向があった。一方、話し合い2は、話し合いの最初から発言の主語は、私人の「私」ではなく、支部長としての(あるいは女性会メンバーとしての)私として発言されている。さらに、話し合い2当日の終了後にとったアンケートでは、複数のメンバーから「もっと女性会の活動にかかわってきたい」「もっと当該組織の女性会の活動について知りたい」という前向きなコメントが書かれていた。このような変化は、意味スキームの変容やパースペクティブの変容と親和的で、異なる他者との対話によって、当該組織のメンバーであるというメンバーシップや自身がその組織(当該コミュニティ)で求められる社会的な役割を再認識したと言えるのではないだろうか。

4. ミクロな視点からの考察—質問—応答連鎖を通じた意味スキームの変容(森本)

本報告では、異質な他者が入った話し合いが生み出す相転移が、話し合いでの相互行為を通してどのように起こりうるのかを考察するために、3の村田報告でも取り上げた全国組織女性部の別の地区Bで行われた話し合いにおける質問-応答連鎖に注目する。

質問は、相手から特定の情報を得るために行われる行為であるが、その質問の発話構成には、相手に対する質問者の見方やスタンス、前提などが組み込まれている (Raymond, 2003; 串田・林 2015 など)。例えば、「明日は何時に行くの?」という質問は、相手が「行く」ということを前提にしている。そして、「10時に行く」と答えることは、同時にこの前提に暗黙のうちに同意していることになる。ところが、他のメンバーは行くが自分には行かない場合など、応答する側がその前提に同意できない場合、この暗黙の前提に同意しないように応答を構成する必要が出てくる (串田・林, 2015)¹。したがって、質問-応答連鎖において、質問と応答がそれぞれどのように組み立てられているのかを分析することで、質問者と応答者のそれぞれ相手に対して持っている見方やスタンス、前提を明らかにすることができる。さらに、応答に対する質問者の反応には、元の質問が体現していた前提やスタンスがどのように変化していったのか (もしくは変わらなかったのか) を見ることができる。本報告では、質問で体現されている前提や見方に対して、応答者が何らかの抵抗を示していることが観察される事例を取り上げ、話し合いの中で相手に対する見方や理解が変容していく過程の一端を捉える。

本報告で扱う全国組織女性部は、若手の加入率が減り、シニア世代が組織を支える構造になっていることから、若手の加入の促進が喫緊の課題である。B地区は農業が主たる産業となっており、ここの女性部でも、若手や新しい人の加入がないことから、従来のメンバーの負担が年々増えており、組織の活力も失われてきているという状況でもあった。こうした現状を改善するための具体的な課題として検討されたのが、①メンバーの満足度を高める、②組織の課題を共有し、目的に向かって活動する、の2点であった。これらの課題に取り組む方法を探るために、支部長会のメンバー12人が参加して第1回目のワークショップが開催された。ワークショップでは、①女性部の活動に参加してからこれまで魅力に感じていたこと、②今後実現したいこと、③今後どんな一歩を踏み出したいか、の3点について、順に話し合った。その結果、女性部が「地域に頼られる、必要とされる存在」となると同時に、「自身も若い人も気軽に参加できる場」となることをメンバーが望んでいることが明らかになった。この結果を踏まえ、5か月後に、女性部に加入していない若手の女性を招き、若い女性の参加に関する情報収集と相互理解を促進することを目的に第2回ワークショップが開催された。

分析の対象とした第2回のワークショップでは、まず、女性部のメンバーであるシニア世代 (5名) と、この日招かれた非加入の若手女性 (4名) の2つのグループに分かれ、それぞれが相手に聞いてみたいことについて話し合い、女性部メンバーは質問カードを作成した。次に、両世代が入ったグループを2つ作り、質問カードを使いながら対話を進めた。

第1回目のワークショップ及び第2回目の対話前の話し合いにおいて、シニア世代は、女性部非加入の若手女性に対して、「最近の若い人は忙しいから女性部を敬遠している」「農業に対する関心がそれほど高くない」などの印象を話していた。シニア世代が作った質問カードにも、そうした印象を体現するような質問が含まれていた。ところが、話し合いが始まると、シニア世代の質問が示す前提や見方、スタンスに対して、若手女性が抵抗を示す場面がいくつか見られた。以下では、こうした場面において、質問がどのような前提を体現し、若手女性がその前提への抵抗もしくは同意の回避をどのように行っているのか、さらに、若手女性の応答に対してシニア世代がどのように反応していくのかを、事例を通してみていく。なお、以下の事例のうち、Sは女性部部長、AとBは女性部メンバー、CとDは若手女性を示す。

[事例4-1] (20190125_B 0:02:43)

⇒01 C: 農家のことで学びたいことや知りたいことは。(質問カードを読む)

02 (1.2)

03 D: 学びたいことでは:.,

04 A: やりたいこと.

05 B: () ((Dに指しをししながらAに向かって))

06 A: 何もない. hu hu huh

⇒07 C: >なんか<わ-わたし-うち農家だから: [>なんか<最低限の[こと分かるんですけど:

08 A: [うんうん [うん

09 A: うんうんうん.

⇒10 C: 友達で:非農家も-d-[あもう自分たちだけで暮らしてる人とか[って:., (0.8)あの:

¹ そのような応答の構成の例として、Raymond (2003) は、英語会話における Yes/no 疑問文に対しては Yes ないし No を含んだ応答 (type-conforming responses) がなされることが選好される一方で、応答者が質問者の質問の前提やスタンスをそのまま受け入れることに問題を見出したり抵抗したりする際に、Yes/no が含まれない応答 (nonconforming responses) を行うことを明らかにしている。また、串田・林 (2015) は、WH 質問に対する応答の冒頭に産出される「いや」が、質問が体現する前提への抵抗を示す方法として用いられていることを例証している。

11 A: [うんうんうん. [うん
 12 (1.0)
 ⇒13 C: >も<畑が:言ったらない(.)うち[も結構あるんです[[よ. でそれで: なんか(.) どうしたらいいのって=
 14 A: [うんうんうんうん.
 15 S: [うん.うん.
 16 B: [[うん,あ:
 ⇒17 C: ⇒逆に聞かれるん(.)ですよ.
 18 S: うん
 19 B: [あ:.
 ⇒20 C: [>ではプランターでやったらとかゆっても:プランターで何をどう用意してなにをどうどの時期にどこまで
 ⇒21 やればいいのか[てゆう: どんどん質問質問質問質問で:,[.h
 22 S: [うん. [うん.
 ⇒23 A: あ:やっぱりそうゆう人(.)[でも:>なんか,<] 栽培してみたい[って気持ち[は,あるんだ.
 24 C: [いる-(.)います.] [みたい. [はある.
 25 C: あるよう(です.)=やっぱり子供たちに見せたいとか:,

1 行目の質問「農家のことで学びたいことや知りたいことは」は、C と D が農家のことを知らないことを前提としている。つまり、この質問には、農家である、もしくは農家についての知識を持っている女性部メンバーの S, A, B と、非農家で農家についての知識がない C と D という、農家—非農家というカテゴリー対が導入されている (Sacks, 1972)。それに対し、C は 7 行目で「わたし、うち農家だから、最低限のこと分かるんですけど」と述べ、「非農家」で「農家についての知識がない」者という、C に対するカテゴリー化に抵抗している²。その上で、非農家の友人が自分に質問をしてくるという話を持ち出す (10, 13, 17, 20, 21 行目)。この応答を通して、C は、「農家—非農家」という、質問が導入したカテゴリー対を、自分と自分の知り合いの間に適用し、「農家について学びたいことや知りたいこと」という質問を、自分個人に向けられたものではなく、「農家について知らない人」に向けられたものとして取り扱っている。

この C の応答に対する質問者側の受け取り方を見てみると、23 行目で A は、「あ: やっぱりそういう人でもなんか栽培してみたいって気持ちはあるんだ」という気づきを述べて、C の応答を自分たちの質問に適合的なものとして扱い、C 自身についての回答は追求していない。このことから、A もまた、1 行目の質問を、C 個人に対するものではなく「農家について知らない人」に対するものとして逆及的に取り扱っていると言える。「そういう人でも」という表現も、C の非農家の友人や知人のみを指示することで、すでに C を「非農家」に含まれない者として扱っており、この時点で、C に対する「非農家」という見方はすでに修正されているのである。

このように、異質な者同士の話し合いでは、質問によって体現された相手に対する前提や見方が、相手の応答によって修正されることで、相互の理解が促進されていくということがあると思われる。また、この事例では、C が自分に対するカテゴリー化に抵抗を示しつつも、農家—非農家というカテゴリー対を利用して応答を組み立てていることで、質問者は「非農家の若い人」たちが農家について知りたいことは何かという情報を得ることができている。この場の活動が、農家のシニア世代と、農家について知らない(であろう)若い世代の話し合いであるという参加者たちの理解が、それぞれの質問と応答の組み立てに反映され、その場の参加者同士だけでなく、彼らを含むそれぞれの世代について知ることへとつながっているといえる。

以下の事例 4-2 は、質問の受け手である若手の女性が「女性部に参加しない」理由についての質問者の想定が、質問に組み込まれている例である。女性部メンバーの E と F, 若手女性 G と H の 4 人で構成されたグループでの話し合いである。

[事例 4-2] (20190125_A 01:44:58 IC)
 ⇒01 E: 同年代の、仲間がいたら、活動に参加できますか。(質問カードを読む)
 02 (0.4)
 ⇒03 E: 女性部に。
 04 G: あ:.....
 05 (1.0)
 ⇒06 E: #これもまた子供がいるから[#な:..
 #((Fに視線)) #((Gに視線))
 07 G: [°ん::う:::ん.°
 08 (0.6)

² C は同時に、「最低限のこと分かる」と、自分の農家に対する知識を「最低限のこと」として低く見積もることで、シニア世代の質問が全般的な外れなわけではないことを示し、質問の前提を完全に否定することはしていない。

⇒09 F: でも子どもがいても:同年代だったら,=
 10 E: =うん=
 ⇒11 F: =お互い子連れで来てるかもわかんない.
 12 (0.6)
 13 F: それにもよるでしょうけ[ど].
 ⇒14 G: [なんか,(0.5)時間とかにしばられなくて:ほんとに好きな活動だけ来ても
 ⇒15 いいよっ(.)とかだったらなんか(.)来やすい.(0.8)かな:: と.[huh
 ⇒16 F: [う:んその好き(な活動つうのもかならず)
 ⇒17 人それぞれだからね.=
 18 E: =うん.
 19 G: >なんかたとえは<さつき:出た>その<シニア世代にして[もらいこと[この:(.)h イベントの:
 20 E: [うん,これ.
 21 F: [うん.
 22 企画,>とかだったら,<

1・3行目の質問は,同年代の仲間がいないことが,若い女性が活動に参加しない理由になっているのではないかという,質問者である女性部メンバーの想定を体現している.これに対して,4行目でGは「あ:::~::~:」と発話して,質問内容がまったく想定外ではないことを示す(Endo, 2018)が,質問自体には答えず,1秒の間が空く.このGの反応とその後の応答の不在が,Gの応答が否定的であることを予示している.すると,質問者のEはFに視線を向けて「これも子供がいるからな:::」と発言し,発話末尾の「な:」でGに視線を戻す.このEの発話は,「子どもがいる」ことを女性部の活動に参加できない理由の候補として提示するものであると同時に,Gから「同年代がいても参加できない」という否定的な応答が返ってくることを想定して,その応答を先取的に述べたものでもある.それに対し,Gは7行目で「ん:::う:::ん」
 と応答するが,小声でしかも音が引き延ばされていることから,Eが提示した応答の候補を完全に承認しているわけではないことが見てとれる.さらに0.6秒の沈黙の後,Fが「でも子どもがいても:同年代だったら,お互い子連れで来てるかもわかんない.」とEの発話に対して反論するが,「お互い子連れで」という表現から見てとれるように,この発話は,G個人ではなくGを含む子供がいる若い女性全体を指している.つまり,事例5-1と同様,この質問はGに向けられたものであると同時に,子どもがいる若い女性全体に対する質問としても投げかけられたものであることが遡及的に示されているのである.

他方,Gは14・15行目で,「時間にしばられず好きな活動だけ参加できるのであれば来やすい」と述べる.この発話は直前の6行目から11行目のEとFのやりとりに対する反応ではなく,1・3行目の質問に対する応答として理解可能である.そしてこの応答は,「どうやったら」参加しやすいかを答えることで,質問が体現した想定を否定している.それに対し,16・17行目でFは「ひとそれぞれだからね」と否定的な評価をするが,Gの応答自体を質問に適合しないものとして取り扱ってはいない.ここでも質問-応答連鎖を通して,質問者の想定が応答によって修正され,それを質問者が受け入れるというプロセスが見られる.

以上,異質な他者との話し合いにおいて,お互いに対する見方や想定が変化していく過程が,実際の相互行為の中でどのように起こっているのかを,2つの事例を通してみてきた.変容的学習論の観点からこの過程を見ると,2.新たな意味スキームを学ぶこと,もしくは3.意味スキームの変容による学びと言えるかもしれない.この2つの事例は,これまで対話したことのない他者との話し合いの場で,質問に組み込まれた相手に対する見方,もしくは「若い女性は子育てが忙しいから活動に参加できない」「若い女性は農家について知らない」といった信念が,目の前の相手によってその信念を否定されたり修正されたりすることによって変容を迫られることがあることを示している.つまり,話し合いは,こうした信念を外化し,変化の可能性にさらすという効果があると言えるだろう.また,質問によって導入される質問者と応答者の間のカテゴリー対への志向は,その場の参与者同士の相互理解だけでなく,彼らと同じカテゴリーに含まれる人々についての理解にもつながっていた.ワークショップ後のアンケートでは,「楽しかった.若い人たちの考えている事,思っている事を知ることができた」「楽しかった.日頃気になっていたことも聞いた.いろんな世代の人の話を聞いたので参考になった」という声が多く見られた.

質問という行為は,こうしたワークショップに限らず日常生活においても,異質の他者同士がお互いについて知り理解を深めるありふれた方法である.話し合いを通して相互理解が深まると言われるが,なぜ深まるのか,そしてそれがどのようにして起こるのかについては,まだ十分に探究されていない.実際の相互行為で何が起こっているのかを精緻に記述し探究することは,話し合いを通じた意味スキームや意味パースペクティブの変容の具体的なプロセスの解明に寄与し,相転移を引き起こす話し合いのデザインを考える手がかりを与えてくれるのではないかと思われる.

注

会話文内で使用しているトランスクリプト記号は、西阪・串田・熊谷（2008）に従っている。

参考文献

- Crick, Bernard (2000). *Essays On Citizenship*. London: Continuum. (関口正司, 岡崎晴輝, 施光恒, 竹島博之, 大賀哲訳(2011). シティズンシップ教育論：政治哲学と市民. 法政大学出版局)
- Endo, Tomoko (2018). The Japanese change-of-state tokens a and aa in responsive units. *Journal of Pragmatics* 123, 151-166.
- Goffman, Erving (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Heritage, John (2012). Epistemics in Action: Action Formation and Territories of Knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), 1- 29.
- Holzman, Lois (2009). *Vygotsky at work and play*. London: Routledge. (茂呂雄二訳(2014). 遊ぶヴィゴツキー——生成の心理学へ 新曜社)
- Kania, J, and Kramer, M. (2011). Collective Impact. *Stanford Social Innovation Review* 9, no. 1: 36- 41.
- 串田秀也・林誠(2015). WH 質問への抵抗：感動詞「いや」の相互行為上の働き. 友定賢治(編) 感動詞の言語学 ひつじ書房, 169-211.
- Lave, Jean, & Wenger, Etienne (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press. (佐伯胖訳(1993). 状況に埋め込まれた学習 産業図書)
- Mezirow, Jack (2010). *Transformative Dimensions of Adult learning*. Jossey-Bass. (金澤睦, 三輪健二監訳(2012). おとなの学びと変容—変容的学習とは何か 鳳書房)
- 水上悦雄(2019). 話し合いで話し手/聞き手になるための声の間合い～「仲間」になるまでのプロセスの分析～ 日本認知科学会分科会間合い—時空間インタラクション第13回研究会発表予稿集,
<https://sites.google.com/site/jccsmaai/history/13th/>
- Murata, Kazuyo (2018). Humor and Laughter in Japanese Business Meetings, *Japanese at Work: Politeness, Power, and Personae in Japanese Workplace Discourse Cook*, Haruko Minegishi, Shibamoto-Smith, Janet S. (Eds.), Palgrave Macmillan, 151-175
- 村田和代(2013). まちづくり系ワークショップ・ファシリテーターに見られる言語的ふるまいの特徴とその効果—ビジネスミーティング司会者との比較を通して— 社会言語科学, 第16巻第1号, 49-64
- 村田和代(2019). 〈つなぎ・ひきだし・うみだす〉ためのコミュニケーションデザイン, 白石克孝・村田和代編 包摂的発展という選択—これからの社会の「かたち」を考える 第7章, 日本評論社, 152-173.
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子(2008). 特集：相互行為における言語使用：会話データを用いた研究について. 社会言語科学, 第10巻2号, 13-15.
- Raymond, Geoffrey (2003). Grammar and social organization: Yes/no interrogatives and the structure of responding. *American Sociological Review*, 68, 939-967.
- Sacks, Harvey (1972). On the analyzability of stories by children. In Gumperz, J. John & Hymes, Dell (Eds.), *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, 325-345. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- 佐野亘・井関崇博・森本郁代・村田和代(2017). コミュニケーションと関係性の相転移——市民教育の観点から(分科会) 日本地域政策学会第16回全国研究大会, 中央学院大学, 2017年7月2日.